

令和五年度

滝川第二中学校 入学考查 問題

A 1 日程

国語

(五十分・百五十点)

注意事項

- 1 問題は1ページから15ページまであります。
- 2 解答は、すべて解答用紙の枠内わくないに記入しなさい。
- 3 「開始」の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 4 受験番号と氏名を、解答用紙と問題冊子の表紙に正しく記入しなさい。
- 5 「終了」の合図で筆記用具を置き、監督かんとくの先生の指示に従いなさい。

受験番号						氏名
		—				

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指示された字数には、句読点その他の符号ふごうもそれぞれ一字としてふくみます。)

学会を立ち上げるくらいだから、きっと日高さんは子どものころからいきものの行動のおもしろさに気づいていたのでしょうか？と尋ねたずられることがある。

そうだといえば格好いいが、やはりそれは研究者になってから気づいたことだと思う。二十代のころからさまざまな人の話を聞き、書いたものを読むうちに、だんだん、動物行動のなぜを知る学問が気になってきた。

ある動物がなぜそのような行動をとるか。答えを知るために動物行動学では観察や実験によって行動の「仕組み」や発達のしかたを考える。そのとき、いつも取り上げられるのが、その行動は生得的(「A」)か後天的(「B」)かという問題だ。

議論は戦前から現在までずっと続いているが、そこにいちばん大きな影響えいきやうを与あたえているのは、科学そのものというより、それぞれの時代の感覚ではないかと思う。(I)、それほど理論的に話が進んでいるわけではない気がするのだ。

日本では戦前はいろいろなものが最初から決まっておりますと

いう話が主流だった。それが戦後、^①いや、そうではないのであつて、という方向に変わった。

ちょうど進化論が脚光きゃくこうを浴びてきたところで、そういう新しい議論もずっと受け入れられた。一般いっぱんの人の考え方も、カミサマがこう決めたのだといわれるとそう思ってしまうような時代から、いや、そうではない、我々人間の勉強が足りないんだと思うような時代が変わった。

昆虫こんちゅうについても、本能で生きているといわれるが、その本能も生得的なものではないと考えなくてはいけないのではないかと主張する研究者が出てきた。

時代の思想とは強烈きやうれつなもので、当時はそういわれると、そう考えなくてはいけないのかもしれないと思ったりした。

そんなふうには戦後しばらくは、日本でも世界でも、人間ふくを含めたいきものの行動は、生まれたあとから周りの環境かんきやうによって変えられるという時代風潮が続き、生まれつきの本能があるといういい方はおかしいといわれた。

しかしやがて、ほんとうにそうなのかという声が高くなり、近年は再びいきものにはやはりガチッと決まった本能の部分があるのではないかという話になっている。

一方が強く主張する時代があり、またその反論の時代があり。遺伝か学習かの問題は、^② 延々と振り子のように両方のあいだで揺れをくり返している。

なぜ我々はいっしょうけんめいそんな議論をするのか。ぼくはそのおおもとは戦争だと思っている。

その行動が生得的か後天的かということは、^③ 我々全員の身のふり方に関わってくるのだ。

^④ 人間はもともと戦争するようにできているいきものなのか、戦争は避けられないのか。(Ⅱ)、正しい考え方と正しい環境の中にあれば戦争は起きないのか。

たぶんそのようなことがいちばん現実的な問いだろう。

戦争はなくしたいとみな本気で思っている。ないほうがいいと思っているのに起こるのはなぜか。

学習が足りないからか。本来なくならないものなのか。

(Ⅲ)、絶えずそんな議論をしながら戦争をしてきているわけだけでも。

どんな学問も人間のその後のあり方に返ってくるものがある。動物行動学もそのひとつだ。

戦争を好きな人はいないのにそれが起こってしまうという問題

にどういう態度をとるか。それが人間を含むいきものの行動を研究することに関心が集まる背景ではないかと思う。

では人間はほんとうに戦い合うことをやめられないのだろうか。いろいろな例を眺めてみると、どうも本来戦ういきものというわけではなく、状況によって、下手をすると戦いになったり、ならなかったりしている。また、戦わないことが必ずしもよい結果につながらないこともある。

そのように現実のものごとは複雑におさまっているのではないか。だから動物行動学では、人間は単純にどういうものと定義するのではなく、行動によっていろんなことが起こるから行動を研究しなくてはならないというふうに考える。

遺伝か学習かを問題にするのは、どういう場合に生得的になり、後天的になるのか、その条件を明らかにしたいからだ。どういうときにはどうなる、なぜ、いかなる理由によって、ということとを詳しく示そうとする。

昔は〇〇は××であるとかスパッと明らかにするのが学問で、学問とは結論を出すものだと思われていた。それが十八世紀くらいからの積み重ねが進み、結論にいろいろな条件や理由がついてきて、それをていねいに探るのが学問であるというふうに変わって

きた。

それは人間の見方を変えることにもつながっていったと思う。今の学問は探っていくこと、答えが見えなくても探ることに意味がある。

かつてはカミサマがそう決めたという単純な理由で納得したかもしれないが、やっと人間はそのレベルを超えて自分の頭で考えはじめたということだろう。

その代わり、学問の成果は断定ではなく、△△の可能性が高いというような、曖昧模糊としたいい方になってきた。

人間は、これは何だろうと思うと探らなくては気がすまないいきものだ。

それは単に好奇心という言葉で表せるような程度ではなく、もっと深い、人間本来の何かだと思う。

それが何かぼくにはよくわからないが、まじめに議論しはじめるとエライことになるような気がする。

もちろん、「これは何だろう?」と思わない動物はいない。

水族館だって魚が人間をこれは何だろうと見ている。食えるかな、怖いかな、のどちらかだろうと思うけれど。

答えが得られるかどうかは別にして、何なのだろうという疑問

はすべての動物が持っている。それは好奇心よりもっと漠然としたものではないだろうか。

どういう動物も目の前のものに対して疑問を持ち、それによって生きている。周りの危険を知り、食べられるものを探る。

人間の場合はじっと見るだけでなく、さわったり実験したりして、理屈や目的をつけたりする。学問はその最たるものかもしれない。

解明すると快感、というよりも、解明せずにはいられない、解明して得にならないことがわかっていても、つい探ってしまう、探らなくてはいけないという気持ち。いいかえれば、それが人間の最も（X）なところではないだろうか。

（日高敏隆『世界を、こんなふうに見てごらん』より。設問の都合上、一部改変したところがある）

問一【仕組み】を外來語に直したとき、最も適切なものを、

次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア リアル イ メカニズム ウ モチベーション
エ プログラム オ サステイナブル

問二 「A」「B」にあてはまる最も適切な二字の熟語を本文中からそれぞれ書きぬきなさい。

問三 空欄Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにあてはまることばとして最も適切なものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア それとも イ もつとも
ウ ところで エ つまり

問四 ——線部①「いや、そうではないのであって」の後に補うことのできる表現を本文中から十五字以内で書きぬきなさい。

問五 ——線部②「延々と振り子のように両方のあいだで揺れを

くり返している」とありますが、その内容について説明した次の文の空欄ア～ウには「生得的」「後天的」のいずれかがあてはまります。「生得的」があてはまれば「1」を、「後天的」があてはまれば「2」をそれぞれ答えなさい。エにはあてはまることばを本文中から五字で書きぬきなさい。

動物の行動について、戦前はアなものという考えであったが、戦後はイなものとは主張されるようになった。しかし近年はウなものと考えられている。このように主張と反論がくり返されるのはエがその考え方に大きな影響を与えているためである。

問六 ――線部③「我々全員の身のふり方に関わってくる」とあ

りますが、それはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 戦争という現実的な問題の解決に動物行動学を利用できるということが、学問へ人々の関心が集まることにつながっていくから。

イ その行為が生得的か後天的かという議論を尽くすことが学問の発展につながり、ひいては人類にとっての利益となるから。

ウ 戦争を避けようとしているのに戦争をしてしまうという理由を説明することが、人間が戦争をなくしたいと本気で行動することにつながっていくから。

エ その行動が生得的か後天的かという問題を研究することで、人間の今後のあり方が決まってくるから。

オ 現実的な問題である戦争に関する問いを研究することが、いきものの行動を研究することと直結するから。

問七 ――線部④「人間はもともと戦争するようにできているい

きものなのか」という問いかけに対して、筆者が導き出している答えが書かれた部分を本文中から五十三字で探し、最初の五字を書きぬきなさい。

問八 空欄Xにあてはまることばを本文中から一語で書きぬきなさい。

問九 本文の内容に関する説明として最も適切なものを、次のア

イから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は戦わないことが必ずしもよい結果につながらない
ということを経験したので、戦争はしたくないと
思っている。

イ いきものの行動は生まれつきの本能によるのか、生まれ
たあとから周りの環境によって変えられるのかの議論につ
いては、決着がついた。

ウ 昔は結論を出すものが学問だと考えられていたが、その
結論に付帯する条件や理由を探ることが今の学問だと言え
る。

エ カミサマがそう決めたという理由で納得していたもの
を、自分で考えるようになったことで、はっきりと結論が
出せるようになった。

オ 動物も人間も目の前のものに対して疑問を持つことに
よって生きているが、両者の大きな違いは好奇心の有無で
あると言える。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（指示された字数

には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。）

俊介は家族のサポートを受けながら、中学受験の勉強に励んで
いる。そんな中、義母である光枝が突然家を訪ねてきた。

「私はてっきり菜月さんは母性愛の強い人だと思ってたわ。俊
介が生まれてからはちゃんと仕事も辞めたし、家にいて家庭を
守ってくれてたのに……子どもたちが可哀そう」

何度も「可哀そう」と責められているうちに、菜月の頭の中
でなにか弾け切れるような音がした。自分にしても、美音を学童
保育に通わせることにはためらいがあった。でもあの子は日々成
長しているし、新しい環境を楽しもうとしている。美音もちろ
ん大切だ。でも俊介も大切で、お金も必要で、自分が働かなくて
はいけなくて……。ようやく①折り合いをつけた気持ちを揺さぶ
られ、どくんどくと心臓が脈打つ。

可哀そう……。テレビも観ず、ゲームもせず、外で遊んだりも
せずに一日五時間も六時間も勉強する俊介は可哀そうなのかもし
れない。

可哀そう……。※ 友達との会話もままならない美音を、放課後まで学童保育所に預けるのは可哀そうなのかもしれない。

でも本当に可哀そうなのは、夢を持ってない大人になることじゃないだろうか。

自分に自信が持てないことじゃないだろうか。

葉月は、俊介が「塾で勉強したい。中学受験がしたい」と言い出した時、驚いたけれど嬉しかった。戸惑いもしたが、でも息子が目標を持って、それに向かって頑張ろうとしていることが誇らしかった。その頑張りを全力で応援してやりたいと思ったのだ。

「お義母さん、俊介は将来やりたいことがあるらしいんです。それで、自分の夢を叶えるために行きたい中学があるって。私と浩一さんは、それを応援しようと決めたんです」

「そんな、子どもの言うことを（A）にしちゃって。夢なんてね、叶えられる人なんてごくごくわずか、ひと握りなのよ」

「（B）通りだと思います。私も夢なんて、持ったこともありませんでした。十七歳の時から必死でただ働くばかりで……」

（中略）

「でも、私はダメだったけれど、俊介には夢があって、もしかし

たらその夢を叶えるかもしれません。まだ十一歳なんです。自分がやりたいと願うことを、好きなことを、職業にできるかもしれないんです」

俊介はなにも百万円のおもちゃを買ってくれとねだっているわけではない。勉強がしたい。中学受験に挑戦して、日本で一番難しいといわれている中学校に進学したい。そう言っているだけなのだ。正直なところ、進学塾がこれほど大変だとは思ってもみなかった。十一歳の子どもをここまで残酷に順位づけするのかと呆れることもある。

―― 1 ―

―― 2 ―

―― 3 ―

―― 4 ―

その姿は、義母が口にする「可哀そう」なものでは、決してない。「お義母さん、俊介はいま毎日必死で勉強しています。その姿を見ていて私は胸が締めつけられるくらいに感動しています。すごいと思ってるんです。誇らしく思ってるんです。俊介は私の息子です。私が育てているんです。あの子の人生は私が責任を持ちます。だからお願いです、俊介には受験や塾に対して否定的なこと

を言わないでください。応援してくれとは言いません。でも全力で頑張る俊介に、沿道から石を投げるようなことはしないでください」

途中から気持ちを抑えることができなくなり、涙が滲んできた。② 光枝に歯向かうのは、浩一と結婚して以来、これが初めてだった。

光枝は唇を固く結び、なにも言葉を発さず黙っていたが、やがて椅子から立ち上がりそのまま玄関に向かっていく。従順だった嫁の反抗的な態度に呆れ、怒り、許せないのだろうとその背中を見て思った。

よく言った、と菜月は心の中で呟く。自分の思いを、本心をきちんと伝えることができた。わが子を守るために強くなったと自分を褒める。高校を中退した時の悲しさや口惜しさは、いまこうしてわが子の盾になるために必要だったのかもしれない。

手の甲で涙を拭っていると、美音が菜月の腰にしがみついていた。母と祖母のやりとりを、息を殺して見ていたのだろう。声は聴こえなくても、二人が烈しくやり合っていたことはわかったはずだから。

玄関のドアが閉まる音が聞こえてから、菜月は美音をぎゅっと

抱きしめた。「大丈夫よ。びつくりさせてごめんね」とその目を見つめて伝えると、美音と手を繋いでリビングを出た。足音を忍ばせて廊下を歩き、俊介の部屋のドアをそっと開ける。目の前には俊介の丸まった背中があり、机を照らすライトに潜り込むような姿勢で（C）に問題を解いていた。

光枝に切った啖呵が聞こえていたら恥ずかしいなと思っていたので、菜月はほっとする。勉強に集中している時の俊介は、菜月が呼ぶ声にも反応しないことがある。リビングで言い合う声は届いていなかったのだろう。

結果がどうであれ、俊介も私もこの戦いを最後まで諦めずにやり遂げる。

そう心に決めて、リビングに戻ろうとしたその時だった。

「お母さん」

俊介が椅子ごとくると振り返り、呼び止めてくる。

「なに？」

③ 平静を装い、首を傾げる。

「おばあちゃん帰った？」

「うん、いまさつきね」

「なんかいろいろ言われてたね」

「……聞こえてたの」

「あたりまえじゃん。お母さんの声、大きすぎだし」

その言い方に、思わずふっと笑ってしまった。葉月が光枝にあらんな口を利くのは初めてで、俊介もさぞ驚いたことだろう。

「おばあちゃん、怒らせちゃった」

葉月が投げやりに言うのと、

「いいじゃん。お母さんはまちがってなかったし」

と今度は俊介が小さく笑った。二人で目を合わせて笑っているうちに、理由もなくまた涙が出てきて、でも心は晴れてすっきりしている。

「お母さんはさあ」

「うん？」

目尻の涙を小指で拭う葉月の顔を、俊介がじっと見てきた。笑顔は消えている。

「十七歳から働いてたんだね。おれ知らなかった」

「……うん。……言ってなかったしね」

「あのさお母さん、いまからでも遅くないんじゃない？」

「なにが」

意味がわからず聞き返すと、俊介の口元がきゅっと引き締ま

る。

「お母さんさあ、いまから夢を持てばいいじゃん。お母さんのやりたいこと、なんかないの？」

「お母さんの……やりたいこと？」

私のやりたいこと……。

夢……？

次の誕生日で三十八歳になる自分が夢を持つなんてことができないのだろうか、俊介の顔をぼんやりと見つめる。

もしチャンスがあるならどんな仕事をしたいか――。

そういえば二十代の頃まではそんなことを考えたような気もする。でももう昔のことすぎて忘れてしまった。忘れたことが少し悲しい。

俊介と目を合わせたまま無言でいると、パンツと手のひらを打つ音がした。振り返れば不機嫌な顔をした美音がドアのそばに立っている。

（ママっ、お腹すいたっ）

唇を尖らせる美音に「ごめんごめん、すぐ準備するね」と笑いかけると、美音が葉月の手をつかんでぎゅっと強く握ってきた。その手のひらの感触が※ 昼間の出来事を思い出させる。泣き

じゃくる京ちゃんの、柔らかくて小さな手の温かさが蘇^{よみがえ}ってきた。煎餅^{せんべい}のようにパリパリに乾いた子どもたちのパンツ。風にはためく小さな青いTシャツ。日に焼けた高矢先生の横顔。空を仰^{あお}いで悲しげに泣く京ちゃんの姿。

晴れた青空の下で目にした眩^{まばゆ}い光が、まぶたの裏に浮^うかんできた。

私の新しい世界――。

急に口をつぐんだ菜月を見上げ、

(ママどうしたの)

と美音が聞いてきた。俊介も眉^{まゆ}を下げてこっちを見ている。その不安げな子どもたちの顔に、菜月は笑顔を返す。

入学式からの数日間、美音は髪^{かみ}をまっすぐに下ろして登校していた。耳に付けた補聴器^{ほちようき}をクラスメイトに見られないよう隠^{かく}すためだ。でもいまは髪を束ねることも三つ編みにすることも怖^{おそ}れずに学校に通っている。俊介の部屋からは毎朝五時になるときまって目覚まし時計のベルがなる。遅^{おく}れを取り戻すため、俊介だけに特別に出された宿題をこなすためだ。早起きが最大の苦手だった息子が、自分の力で起きている。

春を迎^{むか}えてからの一か月間、頑張る子どもたちを見ていると、

自分もまだやれることがあるんじゃないかと思えてきた。自分の可能性を語れるのは自分しかない。そんな当たり前のことを子どもたちが教えてくれる。

俊介が開けた中学受験という新しい扉^{とびら}は、^④菜月が想像もしなかった別の場所へと続いていた。

(中略)

自分を見つめる子どもたちの目を見返しながら、ふと思う。十七歳の時になにもかも諦めた気になっていたけれど、本当にそうだったのだろうか、と。あれから自分はなにも手にしてこなかったわけではない。家族を懸命^{けんめい}に守ってきた。かつて未来を手放したこの手に、いまは大切なものがたくさん入っている。そんなことを、いまこの年齢^{ねんれい}になってようやく気づいた。

「ママも、お兄ちゃんも、ヨーイドン！」

となぜか美音がかけつこの合図を口にする。腹の底から出ている美音の声に心が震^{ふる}える。

「ヨーイドン！」

菜月も美音を真似^{まね}て、大きな声で口にした。

俊介と美音が、身を振^{よじ}って嬉しそうに笑っている。

大切なものを手の中に握りしめながらヨーイドン、私はまた走

り出した。

(藤岡陽子『金の角持つ子どもたち』より。設問の都合上、一部
改変したところがある)

注 友達との会話もままならない美音

…美音は生まれつき耳が不自由ではあるが普通学校に通っ
ている。

昼間の出来事

…保育所の補助員のパートとして働く菜月は、泣いてい
る難聴の京ちゃんをうまく落ち着かせたことで、高矢
先生に「保育士になってくれたら嬉しい」と言われた。

問一 本文中の空欄A・B・Cについて、

① Aには「人から言われたことを、よく考えずに取り入れ
ること」という意味になるひらがな三字を答えなさい。

② Bについて、「言う」を適切な敬語に直し、ひらがな五
字で答えなさい。

③ Cには「他の事に注意をそらさず、一つの事に心を集中
させているさま」という意味になる四字熟語を答えなさい。

問二 ――線部①「折り合いをつけた気持ち」とありますが、そ

れを説明した次の文の空欄A～Cにあてはまる最も適切なこ
とばを、A・Bは本文中のことばを使って十字以内で答え、
Cは後のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

美音のためには A が良いのではないかとも思うが、俊
介のためには B とも思う、 C する気持ち。

ア 我慢 イ 同情 ウ 乱心

エ 葛藤 オ 落胆

問三 この文章での「お義母さん（光枝）」についての説明として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 菜月の意見を真っ向から否定し、自分の価値観を押（お）つけている。

イ 俊介と美音の将来を第一に考え、批判を恐れず積極的に行動している。

ウ 中学受験に否定的で、俊介の考えを変えたいと考えている。

エ 菜月よりも現実的な考え方を持ち、周囲が見えていない菜月に忠告をしている。

オ 従順であった菜月の反撃（はんげき）を受け、自分の考えを改めている。

問四 【1】～【4】にあてはまる文として最も適切なものを、

次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア なんとか這（は）い上がろう、遅れを取り戻そうと、食事をする時間も惜（お）しんで机に向かっている。

イ 塾の授業中に行われる小テストでも思うようには点が取れず、ほとんど毎回補講を受けている。

ウ 春期講習の最終日のテストで、俊介は全クラス合わせて最下位だった。

エ でも俊介は入塾してからこの一か月間、一度も弱音を吐（は）くことはなかった。

問五 ——線部②「光枝に歯向かう」とありますが、その理由を比喩表現を用いて表している部分を本文中から十字で書きぬきなさい。

問六 ——線部③「平静を装い、首を傾げる」とありますが、菜月がそのようにしたのはなぜですか。「くから」となるように本文中から二十八字で探し、最初の五字を書きぬきなさい。

問七 ――線部④「菜月が想像もしなかった別の場所」とほぼ同

じ意味を表す別の表現を、本文中から七字で書きぬきなさい。

問八 この文章の表現の特徴と内容についての説明として適切

でないものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 昼間の出来事を回想する部分に体言止めを連続して用いて、その情景が鮮明に浮かび上がり、読者がその世界へ引き込まれるような工夫がされている。

イ 最後の場面にある「手」の描写は、菜月にとっての過去の暗い記憶と、母として成長した菜月自身の姿を対照的に表現している。

ウ 菜月を主な語り手とし、俊介の中学受験が図らずも、自分自身の人生について考えるきっかけとなった場面を、心温かく描いている。

エ 菜月と光枝が口論する場面では、短い文を積み重ねながら、それぞれの視点から感情が描かれ、緊張感が読者に伝わりやすくなっている。

オ 菜月の過去の回想が入ることで、暗い過去の思い出から菜月が母として成長していく、明るい未来へ向かっている

ことを印象づけている。

問九 あなたが中学受験の勉強を通じて成長したことは何ですか。五十字以内で自由に書きなさい。

三 次の(1)～(5)の、アゝ工の熟語は、その組み立てが一つだけ他と

違うものがあります。その記号を答えなさい。

(1)	ア	豊富	イ	岩石	ウ	行進	エ	呼応
(2)	ア	開門	イ	地震 ^{じしん}	ウ	求人	エ	加熱
(3)	ア	修業	イ	因果	ウ	往復	エ	出入
(4)	ア	仮定	イ	机上	ウ	無線	エ	和食
(5)	ア	不安	イ	未来	ウ	非力	エ	賛否

四 次の――線部の意味として最も適切なものを、次のアゝウから

それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1)	コミユニケーションを図る。	ア	意思疎通	イ	異口同音	ウ	以心伝心
(2)	そういうこと自体、ずうずうしい。	ア	獅子奮迅	イ	猪突猛进	ウ	厚顔無恥
(3)	だれもがいぶかしく思ってしまう。	ア	不審げに	イ	悲しげに	ウ	不気味に
(4)	母の姿を、いやおうなしに思い出させる。	ア	有無を言わせず	イ	最終的に	ウ	ごく自然に
(5)	かねがねあやしいと思っていた。	ア	うわさどおり	イ	以前から	ウ	いつでも

五 次の――線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書

きなさい。

- (1) 朝日に映える富士山。
- (2) アフリカ諸国の問題について考える。
- (3) 海外研修で見聞を広める。
- (4) 舞台の上手より入場する。
- (5) 国語のテストを前に奮い立つ。
- (6) 漢字の学習がニツカだ。
- (7) シンキ一転頑張ろう。
- (8) 友人とドウメイを組む。
- (9) その金属はキシヨウ価値が高い。
- (10) シンキヨにお邪魔する。